古英語の法助動詞文の基底構造

加 藤 鉱 三

序

古英語の基底構造としては普通はSOV語順を設定する。中にはRoberts (1996)のようにSVO語順を設定する分析もあるが，それにはやはり困難な点がある。例えば，古英語の疑問文や関係節で前置詞残置が起こるときには，(1b)のように残された前置詞は必ず動詞の直前に現れることがWende (1915)やAllen (1980)によって明らかになっている。

(1) a CP 85.19 Bi ðæm anwalde, ðe we <sculon> ure
by the power that we shall our
unðeawas mid <ofercuman>,
vices with overcome
"As to the power with which we should overcome our vices"
b (…)wh ……P V …

もしRobertsの言うように古英語の基底構造がSVO語順であったとしたら，(1)のような前置詞残置文は，(2a)から(2b)へと派生が進んだ段階で，動詞の前に移動してきた前置詞句を再分析することになってしまう。移動を受けた要素がその移動先で構造を壊すような操作を受けるというのは考えにくいことである。

(2) a …V[$_{PP}$wh P]
b … [$_{PP}$wh P]V
c … wh…P-V

さらに，SOV語順を持つドイツ語やオランダ語で前置詞残置が起こるときにはPVという形で前置詞が起こり，SVO語順である現代英語ではV(…)Pという形で前置詞が残る。このことから，（前置詞残置のメカニズム自体は明らかではないが）基底語順と前置詞との残り方には何らかの関係があるものと思われる。これが正しいとすると，今見たように古英語の前置詞残置は若干の例外を除いてPVという形でのみ起こるので，RobertsのようにSOV基底語順を全く認めないというのは妥当ではない。また，すぐ後で見るように，古英語では(3)のように節の最後に[本動詞－助動詞]という語順が現れることはごく普通に見られるが，この語順にはOV基底構造を設定するのが最も自然であろう。

(4) ÆCHom i 278:26 Ac ic ðe sylle bysne, hu ðu Godes
but I thee give example how thou God's
acennednysse þy bet <understandan> <miht>
birth the better understand might
'But I will give you an example of how you could understand the birth of God the better'

このように，古英語にOV基底語順は認めなければならない。しかし，それでは節尾の[本動詞－助動詞]語順と全く同等によく見られるところの，(5)のような主語に続く[助動詞－本動詞]語順はどのように派生したらよいのであろうか。

(5) ÆCHom i 234:23 forðan ðaða he wæs gebroht to geleafan mid
for then he was brought to belief with
ðære gegrapunge, þa…
the touching then
'for when he was brought to belief by that touching,…

冒頭で述べたように，古英語の基底語順はSOVを設定するのが普通である(van Kemenade (1987)，Hulk and van Kemenade (1996)，Koopman (1990)，Ohkado (1998a,b)他多数)。一方，加藤 (1989, 1997, 1998)，Kato (1997)やPintzuk (1991, 1993)のように，SOVとSVOの両方を基底語順として認めようという提案もある。(5)の語順をめぐっての，OV/VO両基底仮説のOV基底仮説に対する優位性は加藤(1997, 1998)で既にさまざまな観点から論じているので，本稿では別の視点からこの二つの仮説に関して論じることにする。以下，2節ではOhkado (1998a,b)の観察と分析を概観する。3節では古英語の法助動詞[1]と本動詞との分布に関する事実を見る。4節ではその事実がOV分析，OV/VO分析でどのように扱われるかを見，後者の優位性を主張する。その際，(6)がOV分析で問題となることを指摘し，OV/VO分析と二種類の有標性を仮定することにより古英語の事実がより適切に説明されると主張する。

(6) OがVに後続する時には，普通はVもMに後続する

5節ではまとめと結論を述べる。

2．Ohkado (1998a,b)

本節では古英語の基底語順をSOVとする分析の代表として彼の観察と分析を紹介する。OhkadoはÆlfricのCatholic Homilies第1集に見られる法助動詞を含む従属節全てについて，法助動詞(M)と不定詞(V)の相対語順を調べている。次の表1はその結果である。

The Number of Extra Elements and the Order of Modal and Non-Finite Verbs

a. Extra Element=0

	MV	VM	total
	8 (21.6%)	29 (78.4%)	37

b. Extra Element=1

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	41 (43.2%)	54 (56.8%)	95
(ii)	+Extraposition	43 (84.3%)	8 (15.7%)	51
(iii)	total	84 (57.5%)	62 (42.5%)	146

c. Extra Element=2 or more

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	51 (53.7%)	44 (46.3%)	95
(ii)	+Extraposition	40 (95.2%)	2 (4.8%)	42
(iii)	Mixed	58 (81.7%)	13 (18.3%)	71
(iii)	total	149 (71.6%)	59 (28.4%)	208

表1 Ohkado(1998b)の表(10)

上の表でExtrapositionとあるのは，(7)のように動詞(群)を超えて要素を移動する操作のことである。Ohkadoの体系では動詞句の中では常に動詞が最後に位置するので，表面語順で動詞より右に何か要素がある時にはこの操作が必要である。

(7) Extraposition(外置)

$[_{VP}\ X\ V] \rightarrow [_{VP}\ V]\ X$

Ohkadoは更にMとV以外の要素が何かということに関して分類している。次の表がその結果である。

a. Extra Element=Full Noun Object NP

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	26 (60.5%)	17 (39.5%)	43
(ii)	+Extraposition	19 (95.0%)	1 (5.0%)	20
(iii)	total	45 (71.4%)	18 (28.6%)	63

b. Extra Elements = Object Personal Pronouns

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	4 (15.4%)	22 (84.6%)	26
(ii)	+Extraposition	0	0	0
(iii)	total	4 (15.4%)	22 (84.6%)	26

c. Extra Elements=PP

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	12 (60.0%)	8 (40.0%)	20
(ii)	+Extraposition	16 (76.2%)	5 (23.8%)	21
(iii)	total	28 (68.3%)	13 (31.7%)	41

d. Extra Elements=adverb

		MV	VM	total
(i)	-Extraposition	0 (0.0%)	8 (100.0%)	8
(ii)	+Extraposition	0	0	0
(iii)	total	0 (0.0%)	8 (100.0%)	8

表2　Ohkado(1998b)の表(12)

ここでの観察は(8)にまとめられる。

(8) a　NPかPPを従えるときにはMVが好まれる。特に，NPかPPがExtrapositionを受けるときにはその傾向が一層強くなる
b　従える要素が何もないときにはVMが好まれる
c　人称代名詞目的語はMとVの相互語順に影響しない（表1a.と表2b.を比較）

この研究は重要なものである。特に，語順を要素の重さではなく動詞句全体の重さで捉えた点は従来の研究に見られなかった視点である。この点に関してOhkadoは次のように述べている。

> As we have seen in section 3, the presence or absence of extra elements is an important determining factor in the position of non-finite verbs in relation to modal verbs. This will be accounted for by assuming that Verb Phrases involving extra elements are heavy while those involving no extra elements are light. (Ohkado (1998, pp. 9-10), 下線は加藤)

このように，重い動詞句は右側に置かれる。この考え方は本稿も借用し，4.2節で重要な役割を演ずることになる。さて，この体系の中ではこれは(9)のような操作であるとされている。この操作と(7)の外置については4節で問題にする。

(9) 動詞句上昇(VP Raising)
$[_{VP}\ [_{VP}\ X\ V]\ M]\ \rightarrow\ [_{VP}\ M]\ [_{VP}\ X\ V]$

また，彼はこのCatholic Homilies第1集での観察が，Anglo-Saxon Chronicle, Appolonius of Tyre, Bede, Blickling Homilies, Pastoral Care, Wulfstan's Homiliesでも同様に見られることを実証している点で高く評価されるべき研究であるといえる。

しかしこの研究にも難点はある。その一つは，MとV以外の要素の位置を，Vより前(-Extraposition)かVより後(+Extraposition)かでしか分けていない点である。そのため，XMV語順とMXV語順の区別がつかない。そこで，次節ではExtra elementが人称代名詞でなく目的語一つだけである場合の，M，V，Oの相互語順を調べることにする。

3．法助動詞・本動詞・目的語の相互語順

Lester (1987)のAppendixには，Wulfstan (WHB)，Beowulf，Chronicle (ASC)，

Homilies of Alfric (Pope編) (HAP), Boethius (Boeth.)に現れる法助動詞付きの全ての例文があげられている。そのうち次の条件に合う例を本稿の考察の対象にする。なお，Beowulfは韻文であるので考察の対象とはしなかった。

(10) a 主語を除けば，法助動詞と不定詞と目的語（と否定辞の*ne*）以外には何も含まない[2]
b 人称代名詞でない目的語を一つだけ含む（しかし注2参照）
c 従属節である

今回の調査で対象を名詞句目的語に限定したのは，資料を均質にし前置詞句や副詞（cf. 注2）の干渉を排除するためである。従属節に対象を絞るのは，主節では通常は定動詞の前置が見られるため，動詞句内の語順の観察には適さないからである。なお，ここではKato (1997)の議論に従って，古英語の従属節では普通は定動詞の前置(V-to-I)がない，ということを前提にしている。

調査の結果は次の通りである。下でⅠ～Ⅲは目的語名詞句の語数を表し，Ⅳは4語以上であることを表す。アラビア数字は該当例の数である。例えば，WHBにはmotanの変化形が二語から成る目的語と不定詞を伴って，MVO語順で2つの例に現れることを示す。下の表で，total行の右端の数字が全体の総数であり，'total'の右の数字がASC (1071～)を除いた総数である。ASC (1071～)を入れない総数が必要なのは，ASCのうち古英語部分を代表するParker Chronicleが1070年で終わっており，1070年からは中英語最初期の散文であるPeterborough Chronicleからのデータであるため，中英語の語順を先取りしている危険があるためである。

MVO

	WHB	HAP	ASC (～1070)	ASC (1071～)	Boeth.
cunnan	0	1	1	0	0
		Ⅳ 1	Ⅱ 1		
magan	0	12	0	4	12
		Ⅱ 2		Ⅱ 1	Ⅰ 2
		Ⅲ10		Ⅲ 3	Ⅱ 9
					Ⅳ 1
motan	2	1	0	0	5
	Ⅱ 2	Ⅲ 1			Ⅰ 1
					Ⅱ 2
					Ⅲ 1
					Ⅳ 1
sculan	2	3	4	5	6
	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 1	Ⅰ 1	Ⅰ 1
	Ⅳ 1	Ⅲ 1	Ⅲ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2
				Ⅲ 2	Ⅲ 1
				Ⅳ 1	Ⅳ 2

willan	1	7	2	1	2	
	II 1	II 3	II 1	I 1	II 1	
		III 3	III 1		III 1	
		IV 1				
total 61	5	24	7	10	25	71

表3　MVO語順

OMV

	WHB	HAP	ASC (~1070)	ASC (1071~)	Boeth.	
cunnan	0	0	0	0	0	
magan	3	2	0	1	0	
	III 1	II 1		III 1		
	IV 2	III 1				
motan	0	0	0	0	0	
sculan	0	2	0	0	0	
		II 1				
		III 1				
willan	2	2	0	0	2	
	II 1	III 2			II 1	
	III 1				III 1	
total 13	5	6	0	1	2	14

表4　VMO語順

MOV

	WHB	HAP	ASC (~1070)	ASC (1071~)	Boeth.	
cunnan	2	0	0	0	1	
	II 2				III 1	
magan	0	6	3	0	9	
		II 4	II 3		I 2	
		III 2			II 5	
					III 2	
motan	2	0	1	2	0	
	I 1		II 1	I 2		
	II 1					
sculan	2	2	4	0	2	
	II 2	I 1	II 4		II 1	
		II 1			IV 1	
willan	3	3	7	0	11	
	II 3	II 2	II 5		I 2	
		III 1	III 2		II 5	
					III 2	
					IV 2	
total 58	9	11	15	2	23	60

表5　MOV語順

OVM

	WHB	HAP	ASC (~1070)	ASC (1071~)	Boeth.	
cunnan	1	0	0	0	0	
	I 1					
magan	2	2	2	1	5	
	I 1	I 1	II 2	IV 1	I 3	
	II 1	I			II 2	
motan	0	2	0	0	1	
		II 2			II 1	
sculan	6	3	2	0	1	
	I 1	I 1	II 2		II 1	
	II 5	II 2				
willan	3	3	4	0	10	
	I 1	III 2	I 3		I 4	
	II 2	IV 1	II 1		II 4	
					III 2	
total 47	12	10	8	1	17	48

表6 OMV語順

OMV

	WHB	HAP	ASC (~1070)	ASC (1071~)	Boeth.	
cunnan	0	0	0	0	0	
magan	0	0	0	0	0	
motan	0	0	0	0	0	
sculan	0	2	0	0	0	
		II 1				
		III 1				
willan	1	1	0	0	2	
	I 1	II 1			II 2	
total 6	1	3	0	0	2	6

表7 OMV語順

それぞれの語順で例文を一つずつあげておく。

(11) a MVO

WHB VII 41 þæt heo <scolde> <geberan> [Godes sunu]
that she should bear God's son
"she was to bear God's son"

b VMO

HAP XXVI 114 þæt ðu <unbindan> <sceole> [mine swaran
that thou unbind shall my oppressive

bendas]
bonds
"that you unbind my oppressive bonds"

c MOV
Boeth 26-25 & se ðe <wille> [godcundne wisdom] <secan>
and he that will divine wisdom seek
"and he who wishes to seek the heavenly wisdom"

d OVM
Boeth 30-7 Gif þu þonne [þæt gemet] <habban> <wille>
if thou then the measure have will
"if you then would wish to have that measure"

e OMV
HAP XXVI 54 þæt ðu [þas synne] ne <sceole> <oncnawan>
that thou this sin not shall know
"so that you should not know this sin"

表3から表7を整理したものが次の二つの表である。表8はそれぞれの語順の中で，目的語の語数の割合を示したものである。表9は反対に，それぞれの語数の中で，語順の割合を示したものである。それぞれ上段が例数，下段が%である。それぞれの中で頻度一位のものは四角で囲み，二位のものは下線を施した。ただしOMV語順の二位はいずれも1例のみであるので下線は与えていない。

	MVO	VMO	MOV	OVM	OMV	total
I	4 6.6%	0 0%	6 10.3%	16 34%	1 16.7%	27 14.6%
II	28 45.9%	4 30.8%	39 67.2%	25 53.2%	4 66.7%	100 54.1%
III	22 36%	7 53.8%	10 17.2	5 10.6%	1 16.7%	45 24.3%
IV	7 11.5%	2 15.4%	3 5.2%	1 2.1%	0 0	13 7%
total	61	13	58	47	6	185

表8　語順の中での目的語の語数による%

	MVO	VMO	MOV	OVM	OMV	total
I	4 14.8%	0 0%	6 22.2%	16 59.3%	1 3.7%	27
II	28 28%	4 4%	39 39%	25 25%	4 4%	100
III	22 48.9%	7 15.6%	10 22.2%	5 11.1%	1 2.2%	45
IV	7 53.8%	2 15.3%	3 23.1%	1 7.7%	0 0	13
total	61 33%	13 7%	58 31.4%	47 25.4%	6 3.2%	185

表9　目的語の語数語との語順の%

ここでの観察は(12)にまとめられる。なお，以下でVP1はMを主要部とするVP，VP2はVを主要部とするVPを指す。

(12) OがVに後続する場合
  a　MVOが多くVMOは少ない
  b　MVO，VMOいずれもOは重く，そのためVP2も重い。
(13) OがVに先行する場合
  a　MOVとOVMは大差ないがOMVは少ない
  b　MOVに比べてOVMはOが軽めであり，そのためVP2も軽い
(14) 語順の選択
  a　Oが軽いほどOVMが選ばれやすく，Oが重いほどMVOが選ばれやすい。MOVはその中間である。
  b　しかしそれは絶対的なものではなく，軽いOでもMVOが選ばれ，反対に重いOでもOVMが選ばれることがある。

4．OV分析とOV/VO分析

本節では，2節と3節で見た事実がOhkado（1998a, b)に代表されるOV分析と，本稿のOV/VO分析でそれぞれどのような扱いになるのかを見る。

4.1　OV分析

Ohkado（1998a,b)に限らず，古英語の基底語順をOVとする分析ではどれでも，(12)の語順を派生するには次の二つの操作を必要とする。ただし，議論が煩雑になるのを避けるため，ここではvan Kemenade（1987)やKoopman（1990)が仮定している動詞上昇(VR)は必要最小限にしか仮定しないが，Ohkado（1998a,b)も動詞上昇を仮定していないことからも

わかるように，それによって議論が影響されることはない。その理由は後述する。

(7) Extraposition(外置)
$[_{vP}\ X\ V] \rightarrow [_{vP}\ \ V]\ X$

(9) 動詞句上昇(VP Raising)
$[_{vP}\ [_{vP}\ X\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ X\ V]$

(14) OV 分析での派生
a MVO
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ O\ V] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ \ V]\ O$
動詞句上昇　　外置
b VMO
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}[_{vP}\ \ V]\ M]\ O$
外置
c MOV
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ O\ V]$
動詞句上昇
d OVM
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M]$　基底語順
e OMV
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ O\ M\text{-}V]$　または
動詞上昇
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ O\ V] \rightarrow O\ [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ \ V]$
動詞句上昇　　目的語転移 (Object Shift)

前節で次に再掲する(12)を観察した。

(12) O が V に後続する場合
a MVO が多く VMO は少ない
b MVO，VMO いずれも O は重く，そのため VP2も重い。

さて，この観察は OV 分析ではどのように扱われるのだろうか。MVO，VMO ともに VP2 が重いので，(14a,b)のようにまず動詞句上昇を適用し，さらに MVO では重い目的語を外置する，という派生[3]は(12b)の観察に合うものである。しかしこの派生には問題がある。第一に，一旦右方移動した要素から更に外置するという操作は認められないものである。
一般的に，右方移動された要素からの抜き出しはできない(cf. Haegeman and van Riemsdijk (1986))ことが知られている。(15)は現代英語での例である。

(15) a You sold [to Fred] [a beautiful and expensive painting of the mountain]
b *What did you sell [to Fred] [a beautiful and expensive painting of t]?
(Culicover and Wexler (1977, 21))

第二に，そして更に重要なことに，OV 分析では(12a)，すなわち MVO 語順の方が VMO 語順より圧倒的に多い，という事実が説明できない。外置と動詞句上昇という操作は，それを適用してもしなくてもよい操作である。実際，そのいずれも適用しない OVM 語順は文法的である。このように，現代英語で言えば WH 句の移動や，受動文や非対格構文での主語の移動のようにそれを適用しなければ派生が終わらない，という種類の操作ではない。少なくともその意味で，外置と動詞句上昇は「文体的」な規則である。更に，(12)で観察したように，O が重くそのため VP2が重い時にこの二つの操作が適用されやすい，という事実があるため，「文体を整える」，というより積極的な意味でも「文体」規則と言ってよいものである。それを踏まえた上で，もう一度 MVO と VMO の派生を考えてみよう。OV 分析では次に再掲したような派生になることは既に見た。

(14) OV 分析での派生
a MVO
$[_{vP}\ [_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ \ [_{vP}\ O\ V] \rightarrow [_{vP}\ \ M]\ [_{vP}\ \ V]\ O$
動詞句上昇　　外置
b VMO
$[_{vP}[_{vP}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP}\ [_{vP}\ \ V]\ M]\ O$
外置

ここで問題となるのは(16)の二点である。

(16) 文体規則を二度適用しなければならないより複雑な派生である(14a)の方が，O の重さを外置という一つの操作で解消できるより簡潔な(14b)よりもはるかに例数が多いのは何故か？

ここで規則の適用回数を問題にしているのは，「派生の経済性」という極小主義的概念を念頭に置いているのではなく，これらが文体規則である，という点を問題にしているのである。文体規則は文体的な要請によって語順を変える操作である。(14a)ではまず動詞句上昇を適用しているが，それは VP2が重いからである。その適用によって VP2の重さは解消された。しかしまだ O 自体は重いので，更に外置を適用している，という派生になっている。しかし(14b)のように最初から重い O を外置しておけば，その操作だけで文体上の要請は解消されているはずである。だから普通に考えれば一度の操作で解消する派生が選ばれるはずである。それにも関わらず(14b)の簡潔な派生による例の方が，文体的に二重に有標であるはずの(14a)よりはるかに少ない。これは OV 分析の設定にどこか無理があるというのが理由で

あるに違いない，ということになる。因みに，(14)を考えるときに煩雑さを避けるという理由で動詞上昇の可能性を考慮しないことにしたが，これを考慮に入れても議論に変化はない。動詞上昇の適用はおそらく外置の前でも後でもかまわないと思われるが，この場合も，やはりOの重さを一度で解消できる(14b)が選ばれず，何故わざわざ動詞上昇までも適用しなければならないMVO語順が選択されるのか，という同じ問題に行きつく。要するに，OV分析の問題点は(17)である。

(17) OがVに後続する時には，普通はVもMに後続する （=(6)）

この傾向を説明するため，「主要部間の調和」という制約を設定しようという提案も考えられるが，それは採用することは出来ないものである。主要部間の調和は，XPのすぐ下にYPがある時に，その両者の主要部位置を一致させる，という制約である。これを設定すれば，（OV分析ではそもそもこれを設定すること自体OV分析を破棄することになるものと思われるが）MとVが同じ側にあることを要求されるので，OがVの右に来る場合にはそれに合わせてVもMの右側に来ることになる。これにより，一応(17)は説明される。しかし，これを設定してしまうと，今度はMOV語順が何故ごく普通に現れるのかが説明できなくなってしまう。MOVではMとVが逆向きに補部を取っているからである。以上，本節ではOV分析では(17)の観察が説明できないことを見た。

4.2 OV/VO分析

4.2.1 B-有標性とo-有標性

次に，古英語の基底語順はOVだけでなくVO語順も可能であるとするOV/VO分析による扱い方を見る。これは加藤（1989, 1998），Kato（1997），Pintzuk（1991, 1993）で提案されている分析である。この分析では，上で見てきた語順は次のような派生になる。

(18) a MVO
$[_{vP1}$ M $[_{vP2}$ V O]] 基底語順
b VMO
$[_{vP1}$ $[_{vP2}$ O V] M] → $[_{vP1}$ $[_{vP2}$ V] M] O
外置
c MOV
$[_{vP1}$ M $[_{vP2}$ O V]] 基底語順
d OVM
$[_{vP1}$ $[_{vP2}$ O V] M] 基底語順
e OMV
$[_{vP1}$ M $[_{vP2}$ O V]] → O $[_{vP1}$ M $[_{vP2}$ V] または
目的語転移（Object Shift）
$[_{vP1}$ $[_{vP2}$ O V] M] → $[_{vP1}$ O MV]
動詞上昇（Verb Raising）

この派生の仕方によって3節での(14)から(16)の観察がどのように説明されるのかを考察するが，しかしその前に，その説明の基盤となる次の仮定を見ておく必要がある。(19a)は本節の冒頭で述べた文献で主張されているが，(19b-d)は本稿に固有のものである。

(19) a 古英語の基底語順はOVと共にVOが可能である
b OV基底が無標であり，VO基底はb-有標である
c 文体規則の適用はo-有標である
d 有標な選択には理由が必要である
d1 基底レベルでの有標選択（b-有標）は責任が軽い
d2 文体規則適用（o-有標）は責任が重い

(19b)はOhkado（1998b)の観察から必要な設定である。次の再掲する表1 a.にあるように，VP2がV自身以外の要素が何もないときには8割もの高率でVMが選ばれるからである。

a Extra Element = 0

MV	VM	total
8 (21.6%)	29 (78.4%)	37

(19b)のb-有標とは，基底(base)レベルで有標の選択をする，という意味である。基底での選択は，例えばexpectの補文として時制文を選ぶか不定詞を選ぶか，という選択と同じレベルのものであり，それ故(19d2)のo-有標より責任が軽いと考えられる。

(20) a I expect that he will come.
b I expect him to come.

それに対し，(19c)のo-有標は有標な操作(operation)を選択し，文体上の理由によって語順を基底のものから変えている，という意味である。基底語順のままでも非文法的になるわけではないのに，それをわざわざ変えている，という意味でより責任の重い選択である。最後に，(19d)で言う「理由」とは，ここでは要素の重さが該当する。

以上をふまえた上で，次に再掲する3節での観察が(19)のOV/VO分析でどのような説明が与えられるのかを見ていこう。

(12) OがVに後続する場合
a MVOが多くVMOは少ない
b MVO，VMOいずれもOは重く，そのためVP2も重い。
(13) OがVに先行する場合
a MOVとOVMは大差ないがOMVは少ない
b MOVに比べてOVMはOが軽めであり，そのためVP2も軽い
(14) 語順の選択

a　Oが軽いほどOVMが選ばれやすく，Oが重いほどMVOが選ばれやすい。MOVはその中間である。

b　しかしそれは絶対的なものではなく，軽いOでもMVOが選ばれ，反対に重いOでもOVMが選ばれることがある。

4.2.2　観察(12)の説明

まず(12)であるが，本稿の分析ではその派生は次に再掲する(18a,b)である。

(18) a　MVO

$[_{vP1}\ M\ [_{vP2}\ V\ O]]$　基底語順

b　VMO

$[_{vP1}\ [_{vP2}\ O\ V]\ M] \rightarrow [_{vP1}\ [_{vP2}\ V]\ M]\ O$

外置

(18a)では，VP1で補部のVP2が重いためb-有標である主要部先行語順が選択され，またVP2でOが重いためb-有標である主要部先行語順が選択される。(18b)ではOが重いためo-有標である外置が選択される。このように(18a,b)は共に有標語順であるが，それを敢えて選択しているのはOが重いからである。これにより(12b)が説明される。更に，o-有標である(18b)は，より責任の軽いb-有標である(18a)の派生を選択できたにも関わらず，敢えてより責任の重い派生を選択しているのであるので，従ってより条件が厳しいものとなり，それは例の少なさと，表8でVMO語順のみがIIIが一位である事に反映されている。(12a)の観察はこのように二種類の有標性を導入することにより説明される。ここでの説明は，MVO語順が，OV分析で言う所の外置によるものではなく，有標な基底語順を選択することによって導かれると考えていることを強調しておきたい。

今述べた議論を補強するために現代英語での例を見てみよう。現代英語はSVO語順を持つ。Fukui (1993)の言う「規範語順に順行する移動操作は随意的である」という観察を敷衍して，「規範語順に順行する文体規則よりも逆行する文体規則の方がより有標である」と仮定してみよう。さて，現代英語では情報の流れで最も自然なのは，文頭に話題があり文末に焦点がある配列である（高見 (1995)，他)。従って，(21)の配列は不自然である[4]。それを解消する手段として，受動文と話題化文の二つの仕方を考えてみよう。

(21) A stranger hit the boy.

(22) The boy was hit by a stranger.

(23) The boy, a stranger hit.

(22)，(23)ともに話題が文頭にあり，下線部の焦点は文末に来ている。それにも関わらず，我々が日常的に感じるのは，受動文の方が話題化文よりもはるかに頻度が高いと言うことである。これは，受動文がb-有標でありその選択は容易であるのに対し，話題化文は，規範語順に順行するo-有標である重名詞句移動等より更に有標であるところの，規範語順に逆行する

話題要素の左方移動によって派生されるためである，と考えられる[5,6]。

4.2.3 観察(13)，(14)の説明

次に，下に再掲する(13)の観察を考察する。本稿の OV/VO 仮説では上で見たように(18c, d,e)の派生となる。

(13) O が V に先行する場合
a MOV と OVM は大差ないが OMV は少ない
b MOV に比べて OVM は O が軽めであり，そのため VP2も軽い

(14) 語順の選択
a O が軽いほど OVM が選ばれやすく，O が重いほど MVO が選ばれやすい。MOV はその中間である。
b しかしそれは絶対的なものではなく，軽い O でも MVO が選ばれ，反対に重い O でも OVM が選ばれることがある。

(18) c MOV
$[_{vP1}\ M\ [_{vP2}\ O\ V]]$ 基底語順
d OVM
$[_{vP1}\ [_{vP2}\ O\ V]\ M]$ 基底語順
e OMV
$[_{vP1}\ M\ [_{vP2}\ O\ V]]$ → $O\ [_{vP1}\ M\ [_{vP2}\ \ V]$ または
目的語転移（Object Shift）
$[_{vP1}\ [_{vP2}\ O\ V]\ M]$ → $[_{vP1}\ \ O\ \ MV]$
動詞上昇（Verb Raising）

(18c)では，VP1で補部の VP2が重いため b-有標である主要部先行語順が選択されている。それに対し，(18d)では VP2の重さが(18c)ほどではないため VP1，VP2とも無標の主要部後続語順が選択されている。(18c)は b-有標ではあるが，それには（(18a,b)程ではないが）VP2の重さという理由があるため，(18c,d)共に自然な選択である。それにより，(13a)の前半部分と(13b)及び(14a)の観察が説明される。MVO と VMO では O が重いことが多く，MOV は中間的で，OVM では O が最も軽いことを今一度表 8 と表 9 で確認されたい。

次に OMV であるが，これは表 8 と表 9 で見たように，O が特に軽いということはない。それにも関わらず O が前置されているのは何故だろうか。(24)は今回の調査の対象となった(cf. (10))中で OMV 語順を持つ例の全てである。

(24)OMV 語順の全例文
a HAP XXVI 54 þæt ðu [þas synne] ne <sceole> <oncnawan>
that thou this sin not shall know
“so that you should not know this sin”

b HAP XXVII 56 þæt hi [þæs mannes sawle] <sceoldon> <underfon>
that they of-the man's soul should receive
"that they should receive men's souls"

c WHB VIIIb 85 þe [þis] <wile> <underniman>
that this will undertake
"who wishes to undertake this"

d HAP II 81 and þa beoþ ðeafe þe [Drihtnes hæsum]
and those are deaf that Lord's commands
<nellað> <gehyrsumian>
not-will obey
"and those who do not wish to obey Lord's commands are deaf"

e Boeth 9-25 forþa hi [þinu willan] <woldan> <fulgan>
since they thy will would follow
"since they wanted to do your will"

f Boeth 119-28 forhwy swa rihtwis dema [anige unrihte gife] <wille>
why so righteous judge any unjust gift will
<forgifan>
bestow
"why so righteous a judge would wish to bestow any unjust gift"

(24a-e)を見る限り，これらはゲルマン諸語で見られる目的語転移を経た例であるとも考えられる。目的語転移は定表現だけに適用される操作だからである。しかし(24f)の目的語は明らかに不定表現であるので，少なくともこの例は，VO 基底からの目的語転移によるものではなく OV 基底での動詞上昇によるものと考えなければならない。しかしいずれにしても，今まで見たきた語順と違って，この例外的な語順が要求される文体的理由はわからない。しかしこの語順は4.1節で批判した OV 分析でもやはり説明に窮するものであることを付け加えておく。

最後に，(14b)の観察の説明が必要である。まず O が重くなくても MVO や VMO 語順に現れ得ることから考えよう。本稿の説明は，M，V，O 三者の相互語順は，「100%か0%か」という（例えば束縛や格付与のような）文法原理によるものではなく，二種類の有標性によるものである。何度も述べてきたように，有標性はそれを打ち消す「理由」があれば問題にならないという性質のものである。その「理由」は今までは重さのみを問題にしてきたが，焦点化など重さとは別の理由で有標な選択をしている，という可能性が考えられる。このように，O が重くなくとも有標な選択をする，という可能性があることによって，O がそれほど重くなくても V より右側に現れることがあることが説明される。

また反対に，O が重くても MOV，OVM に現れることがあることを説明しなければならない。無標の選択をした場合でも，本来ならば有標な選択をするだけの理由（つまり重さ）がある場合ももちろんある。その場合には注4で援用した久野(1978)の「談話法規則違反のペナルティー」という概念によって説明できる。つまり，重い要素が文末でなく文中にある

場合，それが基底語順を選択した結果ならば「情状酌量の余地がある」，という考え方を採用するということである。

4.2.4 *VOM 語順

今回の調査では VOM 語順は一例も見られなかった。それどころか，今回の調査対象の名詞句目的語に限らず，古英語で VXM 語順がないことはよく知られた事実である。この事実の OV 分析での説明は，「外置される要素は VP2ではなく VP1に付加される」と言うことになると思われる。この仮定はあながち不自然なものではない。しかしその設定の根拠は必ずしも明らかではないように思われる。

この語順は本稿の分析では(25)の基底構造を持つと考えられる。

(25)$[_{VP1}\ [_{VP2}\ V\ O]\ M]$

(25)では VP1は無標であるが，VP2は主要部先行語順を選択しているので b-有標である。有標語順を選ぶにはそれに見合うだけの理由がなければならない。だから O は重い要素でなければならない。しかし(25)では，VP2が b-有標語順を選択していても，実は重さの解消にはなっていない。重さを解消するにはその重い要素があってもかまわない位置，すなわち文末に位置しなければならない。しかし補部位置を折角右側に選んだにも関わらず，(25)ではさらにその右に M があるからである。このように，(25)の選択はその選択のねらいである効果が期待できない配列であるので，原理的にそのような無駄な選択をそもそもするはずがない，というのが本稿の立場での説明である。O の重さを解消するには，MVO 語順や(o-有標ではあるが)VMO 語順を選択しておけばよいのであるから，無理をして(25)を選択する必要は全くない，という理屈である。

5．まとめと結論

以上，本稿では古英語の M を含む文での M，V，O の相互語順を検討してきた。本稿での観察は次のものであった。

(12) O が V に後続する場合
  a MVO が多く VMO は少ない
  b MVO，VMO いずれも O は重く，そのため VP2も重い。
(13) O が V に先行する場合
  a MOV と OVM は大差ないが OMV は少ない
  b MOV に比べて OVM は O が軽めであり，そのため VP2も軽い
(14) 語順の選択
  a O が軽いほど OVM が選ばれやすく，O が重いほど MVO が選ばれやすい。MOV はその中間である。
  b しかしそれは絶対的なものではなく，軽い O でも MVO が選ばれ，反対に重い

O でも OVM が選ばれることがある。

この観察を説明するための仮定と提案は次のものである。

(26) a　古英語の無標語順は OV である。
b　有標性には，基底レベルでの有標な選択である b-有標と，文体規則によって語順を変える o-有標の二種類がある。
b1　古英語の b-有標語順は VO である
b2．b-有標より o-有標の方が責任が重い
c　有標な選択にはそれを選ぶだけの理由が必要である。

(27) a　MVO
$[_{VP1}$ M $[_{VP2}$ V O$]]$　基底語順；VP1と VP2は共に b-有標；理由は O が重くそのために VP2も重いため
b　VMO
$[_{VP1}$ $[_{VP2}$ O V$]$ M$]$ → $[_{VP1}$ $[_{VP2}$ V$]$ M$]$ O　O が重いために o-有標である
外置　外置を選択
c　MOV
$[_{VP1}$ M $[_{VP2}$ O V$]]$　基底語順；VP1は b-有標；理由は VP2が重いため
d　OVM
$[_{VP1}$ $[_{VP2}$ O V$]$ M$]$　基底語順；無標語順；理由がない限りこれが選択される
e　OMV　不明

以上，本稿では(i)OV 分析では古英語の法助動詞構文の語順を説明できないこと，(ii)基底語順に OV だけでなく VO も認め，責任の軽い b-有標性と責任の重い o-有標性という二種類の有標性を仮定することでそれが自然に説明されることを主張した。

注

1．古英語の can や may 等という現代英語の「法助動詞」に当たる単語類は「法動詞」と呼ばれるのが普通である(cf. Allen (1975), Lightfoot (1979))。これは，法動詞が目的語を取っている例が見られることや，ドイツ語のように may can と重ねて使われている例が見られるからである。しかし，次の理由から本稿ではこれらを法助動詞という名称で呼ぶことにする。

(i)　法動詞は古英語期ですでに助動詞用法の be や have と分布が変わらない
(ii)　現代英語でも be や have は助動詞用法とそうでない用法があるように，古英語でも法動詞に助動詞用法があって当然である
(iii)　古英語の法動詞も VP 補部を取るという点では受動や完了の助動詞と同じである

なお，法動詞をここで法助動詞と呼ぶのは(iii)での意味であり，これはこの動詞類の標準的な扱

いであるので，本稿の以下の議論はこの決定でいささかも影響されるものではない。現代英語のように法助動詞が時制と排他的で，それゆえIP主要部に直接生成される，ということを主張しているのではない，ということを断っておくだけで十分であろう。

2．しかしそれだと例文数が少なくなりすぎるので，主語と[M，O，V]以外にも，人称代名詞目的語か，þa・æfre・ær等の時の小副詞を含んでもよいとした。その理由は，これらの要素は回りの語順にあまり関係なくある決まった位置に現れる要素であるからである。つまり，これらの要素は，今問題にしようとしている[M，O，V]三者間の相互語順には影響せず無害であると考えたからである。なお，人称代名詞については(8c)を参照。

3．ここで，本文とは逆に先に外置を適用し，それに更に動詞句上昇を適用するというMVO語順の派生法も論理的には可能ではある。しかしそれは現実的な派生ではあり得ない。何故なら，先に外置を適用すると，その段階ではVP2は重くないからである。

4．(21)は不自然ではあるが，規範語順(基底語順)に従っているので容認不可能であるわけではない。これについては久野（1978)の「談話法規則違反のペナルティー」という概念を用いた説明が有効である。次の二つの対で，(ib)だけが容認性が落ちる。

(i) a John hit a boy on the head.
[旧] [新]
b ?? A boy was hit by John on the head.
[新] [旧]
(ii) a A big boy hit John on the head.
[新] [旧]
b John was hit on the head by a big boy.
[旧] [新] (例文は久野(1978，p.294))

情報の自然な流れは[旧]から[新]であり，(ib)だけでなく(iia)もそれに違反している。それにも関わらず(iia)は容認性が低くない。ここで久野は談話法規則違反のペナルティーという概念を導入してこのような事実を説明している。この概念は，「情状酌量のある余地のある違反は罰しない(ibid. p.301)」というものである。(iia)では談話法規則に違反はしているが，しかしこの文は英語の規範語順に従っているものである。しかし(ib)は(ia)という選択があるにも関わらず，受動という構文をわざわざ選択し，その上で談話法規則に違反している。そのために(ib)は容認性が落ちる。(iia)は違反はしているが「情状酌量の余地がある」ために容認性が落ちない。

上の久野の議論は，本稿の言い方で言えば，敢えて受動という有標の構文を選択するにはそうするだけの理由が必要であるのに，必要ない場合に選択しているから容認性が落ちる，という言い方になる。なお，受動文は能動文から受動変形によって派生するのではなく，派生の初めの段階から受動文である（ただし主語位置は空であり目的語位置には目的語はあるが格付与はされない。cf. Chomsky (1981)）ので，受動構文の選択はb-有標である。

5．英語で話題化構文が意外に少ないことには，本文で述べた理由以外にも，(23)でその少年が殴られたことが分かっている場合には焦点は was hit by a stranger ではなく a stranger だけになるが，(古英語と違って)現代英語の話題化文ではこの a stranger だけを後置することができない，という要因も関わっているように思われる。

6．一方日本語では，現代英語とは反対に話題化の方が受動文より勢力が強いようである。例えば次の対で，話題化文は正文だが受動文は容認されない。なお，日本語では受動文より話題化文の方が自然であるという事実は田中達也によって示唆された(p.c.)ものである。

(i) a *この写真は花子に撮られた (高見 (1995, p.92))
b この写真を/は花子が撮った。

高見(1995)は英語と日本語の受動文の条件の違いを次のように説明している。英語では受動文に対して「インヴォルヴメント」,「特徴づけ」という条件が課せられる。一方日本語の受動文の受動文には,「共感度関係」に違反している場合（簡単に言えば人間が主語でない場合）は「被害／恩恵」か「特徴づけ」が守られなければならず,「共感度関係」に違反していない場合には「インヴォルヴメント」,「被害／恩恵」,「特徴づけ」のいずれかが守られなければならない。(ia)の容認性の低さは前者によって説明される。

さて，本稿の議論に従えば，受動文は基底で選択する b-有標な選択肢であり，話題化は基底語順をわざわざ変える o-有標な選択肢であるため，日本語でも英語と同じように話題化の方が勢力が強いはずであることを予測してしまう。しかしこれは実態とは合わない。

この問題の解決法は，本文で示唆した Fukui の観察を敷衍した「規範語順に順行する文体規則よりも逆行する文体規則の方がより有標である」という仮定によって解決できるかもしれない。日本語は厳格な SOV 言語であるので，要素を左に移動する話題化は順行移動である。そのために日本語の話題化の o-有標性がかなり弱められる，ということは十分考えられることである。しかし，だからと言ってそれだけでは b-有標な受動文より有標性が低くなるとは考えにくい。更に日本語の受動文には上で紹介した高見の研究の言うように英語より強い条件が課せられている。このように考えていくと，(i)の選択は b-有標／o-有標の対立だけで解決できる問題ではなく，更に別の要因が関与しているように思えてくる。その別の要因とは，取りあえずは久野(1978)，Kuno (1987, 1990)，Kuno and Kaburaki (1977)，高見(1995) での「共感度関係の原則」であろうとしておくが，それでは何故日本語では英語よりもそれによる制限がきついのか，ということを考えていかなければならない。今後の課題としたい。

参 照 文 献

Allen, C. (1975) "Old English modals," in Grimshaw, J. (ed.) *Papers in the History and Structure of English,* University of Massachusetts.

Allen, C. (1980) *Topics in Diachronic Syntax,* New York : Garland.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding,* Dordrecht : Foris.

Culicover, P.W. and K. Wexler (1977) "Some syntactic implications of a theory of language

learnability," in Culicover, P.W., T. Wasow and A. Akmajian (eds.) *Formal Syntax,* New York : Academic Press.

Fukui, N. (1993) "Parameters and Optionality," *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.

Haegeman, L. and H. van Riemsdijk (1986). "Verb projection raising, scope and the typology of rules affecting verbs," *LI* 17, 417-66.

Hulk, A. & A. van Kemenade (1996) "Negation as a reflex of clause structure," unpublished ms.

加藤鉱三(1989)「SOV/SVO 言語としての古英語：Catholic Homilies に見られる節中の'nu'をめぐって」, IVY 22, 161-175, 名古屋大学。

加藤鉱三(1997)「古英語 SVO 語順の取り扱いについて」, 日本英語学会第15回大会, ワークショッププログラム『英語史における Reanalysis は検証可能か』における口頭発表, 信州大学。

加藤鉱三(1998)「古英語の SVXY 語順について」, *JELS* 15, 81-90, 日本英語学会。

Kato, K. (1997) "Clause-internal *nu* in Old English : A root/non-root asymmetry," *Linguistics and Philology* 17, 15-40.

Kemenade, A. van (1987)*Syntactic Case and Morphological Case in the History of English,* Dordrecht : Foris.

Koopman, W. (1990) "Old English constructions with three verbs," in W. Koopman, *Word Order in Old English : With Special Reference to the Verb Phrase,* Amsterdam studies in Generative Grammar 1, University of Amsterdam.

久野暲 (1978)『談話の文法』, 東京, 大修館。

Lester, L.A. (1987)*The Modal Verbs of Old English,* unpublished PhD dissertation, University of Texas at Austin, Austin. (Distributed by U.M.I. Dissertation Information Service)

Lightfoot, D. (1979)*Principles of Diachronic Syntax,* London : Cambridge University Press.

Ohkado, M. (1998a) "On the MV/VM order in Old English," paper read at the 10th International Conference on English Historical Linguistics.

Ohkado, M. (1998b) "On the MV/VM order in Old English," an enlarged version of Ohkado (1998a), ms, Chubu University.

Pintzuk, S. (1991)*Phrase Structure in Competition; Variation and Change in Old English Word Order.* unpublished Ph.D. dissertation. University of Pennsylvania.

Pintzuk, S. (1993)"Verb Seconding in Old English : Verb Movement to Infl," *Linguistic Review* 10, 5-35.

Roberts, I. (1996)"Remarks on the Old English C-system and the diachrony of V2," in E. Brandner and G. Ferraresi (eds.), *Language Change and Generative Grammar,* Opladen : Westdeutcher Verlag.

高見健一 (1995)『機能的構文論による日英語比較－受身文, 後置文の分析』, 東京, くろしお出版。

Wende, F. (1915)*Über die nachgestellten Präpositionen im Angelsächsischen,* Palaestra LXX, Berlin : Mayer & Müler.

Lester (1987)の使用した古英語のテキスト

[ASC] : Plummer, C. (1892-99), *Two Versions of the Saxon Chronicle Parallel,* 2 vols., Oxford

University Press, Oxford.

[Boeth.] : Sedgefield, W.J. (1809)*King Alfred's Old English Version of Boethius,* larendon Press, London.

[HAP] : Pope, J.C. (1967-8)*Homilies of Ælfric : A Supplementary Collection*, EETS. 259, 260. Oxford Press, London.

[WHB] : Bethurum, D. (1957)*The Homilies of Wulfstan, Oxford* Press, London.